

あとがき

今回の展覧会は西ドイツの現代作家ヤン・フォス(JAN VOSS 1936年生れ)の最新作1981~83の油彩、テンペラ等のミックスメディア、コラージュ等300号の大作を含む20点余の展示である。フォスの仕事はここ5年前あたりから一層抽象的になり、色彩は冴え、力強いものになってきている。今回はそのフォスをおみせするもので、ペインティングの展覧会としてはわが国では初めての催しである。昨年の4月は梱包の作家クリストの展覧会を開催したが丁度一年後のこの4月に、クリストと大変親しい(クリストとはパリ時代以来の親交という)フォスの展覧会をやるのも何かの因縁か、と不思議に思っている。カタログのテキストとして、フランスの美術評論家イヴ・ミショー氏(YVES MICHAUD)から「うたかたの重み」を、また最近のフォスの仕事をみておられる山口勝弘さんからは「理想の旅—ヤン・フォスの絵を見ること」を、それぞれいただいた。厚く感謝申し上げます。

この展覧会に際して、駐日フランス大使館文化担当参事官のアラン・ジュフロワ氏(Alain JOUFFROY)——氏は美術評論家で「視覚の革命」の著者であり、昨年4月ブリヂストン美術館で開催された「具象絵画の革命—セザンヌから今日まで」展の企画編成責任者でもある——から手紙をいただいた。本国外務省からあなたの画廊でフォス展を開催することを知らせてきた。私はフォス夫妻とは友人である。フォスの展覧会がうまくゆくようよろしく頼みます、というのがその要旨である。フォスは長らくパリを舞台に仕事をしているとはいえ、ドイツ人だし、夫人の淑子さんは日本人である、しかるにフランス大使館からこういう手紙が来るとは……、私にはやはり驚きであった。わが国でこういうことはあるのかしら、と直ちに思い、この単純な一通の手紙にはいろんな問題が含まれている+としばらくはいろいろと思いが広がったのである。

フォスの仕事についてのわが国での紹介は「みづゑ」1969年7月号に種村季弘氏がヤン・フォス「危険な少年神」と題してエッセーを書いておられるのが最初で、その後まとまった論文があるのを寡聞にして私は知らない。ギャラリーグラフィカの栗田さんはすでにフォスの版画展を2度開催されており、第3回目の版画展(オリジナルの小品を含む)を当画廊の展覧会とほぼ時を同じくして催される。この4月にギャラリーグラフィカは新しい画廊(銀座7丁目)に移転されるが、そのオープニングの展覧会がフォス展という訳である。当画廊とも併せてご覧いただくようご案内申し上げます。

この展覧会のためにフォス夫妻が来日されるのはうれしいことである。わが国での滞在が楽しく実り多いものであること祈るとともにフォスの絵画の一層の発展、深化を期待するものである。フォスの絵画は大きな可能性をはらんでいる、というのが私の直感である。

最後にこの展覧会の開催に当りマージ画廊のアドリアン マージ氏(Adrien Maeght)ならびに鈴木憲子さんにご協力いただいた。深く御礼申し上げます次第である。